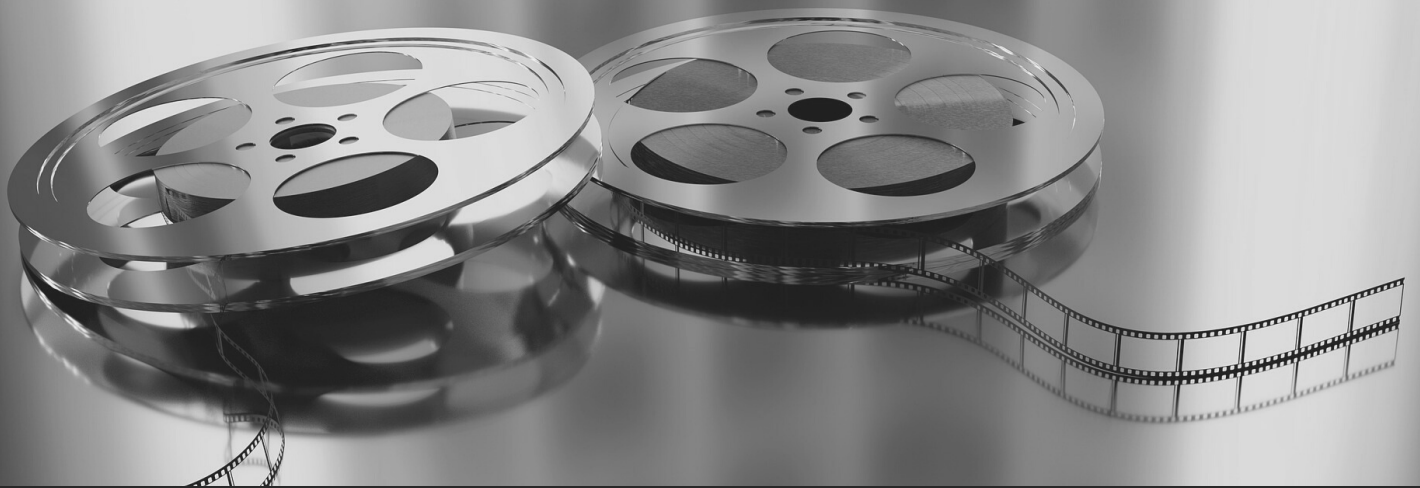


シネマ通信

第3号 (2022年4月4日)



金の糸

第3回鑑賞作品

監督、脚本：ラナ・ゴゴベリゼ
音楽：ギヤ・カンチュリ
出演：ナナ・ジョルジャゼ

日本の”金継ぎ”に
着想を得、ジョージアの
激動の時代と今を
伝説的女性監督が紡ぐ

映画の舞台は、かつてグルジアと呼ばれたジョージアの首都、トリビシの旧市街の片隅。作家のエレネは、生まれた時の古い家で、娘夫婦と暮らしている。
今日は彼女の79歳の誕生日だが、家族のだれもが忘れていた。娘は姑のミランダにアルツハイマーの症状が出始めたので、この家に引っ越しさせるといふ。ミランダは、ソビエト時代、政府の高官だった。そこへ、エレナのかつての恋人アルチルから、数十年ぶりに電話がかかって来る…。
ジョージアの歴史に翻弄された監督ラナ・ゴゴベリゼが、自身の過去を投影し、91歳にして発表した作品。日本の金継ぎのように、金の糸で、過去を大切に継ぎ合わせていく。



About Them

本編の監督ラナ・ゴゴベリゼは、1928年、政治家の父レヴァンとジョージア映画黎明期の女性映画監督ヌツァとの間に生まれました。しかしラナが10歳のとき、父はスターリンの大粛清により処刑され、母も10年間極寒地に流刑されてしまいます。ラナは、孤児院に収容された後、おばに育てられました。

モスクワの国立映画大学卒業後、1961年に初の長編作品「同じ空の下で」を発表。1978年には、ジョージアの近代史に女性の一生を織り交ぜた「インタビュー」で、世界的に高い評価を得ます。以来、映画界をけん引し”伝説の映画監督”と呼ばれています。

一時は政界に転身。駐仏大使となり、ヨーロッパにおけるジョージアの地位向上に貢献しました。

27年間の空白の後、発表したのが本編。これが監督としての集大成かと思いきや、すでに次回作を準備中とのこと。ちなみにご息女も映画監督。三代続いた女性映画監督というのは、世界でも珍しいのではないのでしょうか？

現在は、初の女性大統領サロメ・ズラビシュヴィリが活躍するこの国を、ふと、訪ねてみたくなりました。



About Something

第94回アカデミー賞授賞式を見ました。前評判通りに「ドライブ・マイ・カー」（原作:村上春樹）が国際長編映画賞を受賞。濱口竜介監督の、高揚と緊張がびんびん伝わってくるスピーチが、とても印象的でした。アカデミーやオリンピックの授賞式でいつも思うのは、ああ、この人はいま”人生のクライマックス”に居るんだなということです。

このフレーズを、少し違和感をもって聞いたことがあります。それは、若くしてご主人を亡くし、懸命に働いて一人息子を育てあげた知人が「ムスコが東大に受かったときが私の人生のクライマックス」と語ったときです。彼女の気持ちはよく分かりますが、私はやはり、自分が主語の時にソレを感じたい！単に、業が深いということでしょうか？とはいえ、いつが我がクライマックスだったかは、残念ながら不明瞭。TV番組で、いつが一番幸せだったか？との問いに、多くの人が、結婚、あるいは子どもの誕生と答えていました。ごく普通の善良なる市民にとって、これがモデル・ケースなのでしょう。

ソヒア・ローレンの代表作「ひまわり」のロケ地となった東欧の美しい平原で、いま、祖国と自身とが未曾有の危機に晒されたが故に、世界を舞台に”人生のクライマックス”に立つことになった人物が居ますね。彼が一日も早く、いい形で”小国の一大統領”に戻れるよう祈るばかりです。